

はじめに――これからの古典教育のために

山田和人（同志社大学）

古典を学ぶ楽しさをどう伝えていけばいいのか。

本書は古典教育への新しい切り口として、和本やくずし字を用いた古典教材のあり方を提案するものです。

古典が好きではないという学習者ももちろんいると思います。ですがその「古典」は、既存の常識に縛られたものかもしれません。そうした常識から離れて、古典の豊かな世界に立ち戻り、その面白さを楽しんでみるという、ゆるやかで、ゆとりのある学びの構えがあってもいいように思います。

古典嫌いを減らすよりも、古典好きを増やすにはどうすればいいのか。その解を求めて、古典を他人事ではなく現代と結びつけた共鳴板のように捉え、対話することで少しでも古典に共感できるような方法を提示しています。そんな悠長なことはいってられないという意見もあるでしょう。それは今までそうしたゆとりのある、かつ、短時間で取り組むことができる古典教材がなかったからかもしれません。授業で使ってみることができる短い使い勝手のよい教材があれば、授業の流れの中で適宜使ってみることができるかもしれません。少し時間がとれそうなときに、本書におさめられた教材・実践例を試してみることができるのではないかと。本書はそんな思いで作りました。

実際に、和本やくずし字、あるいは和本とくずし字を組み合わせて授業をしてみると、子どもたちは自分から進んで問題に取り組み、いろいろ調べて意見交換を始めます。自ずと調べ学習の場が形成されていくのです。

くずし字学習はクイズを解く感覚が一番近いかもしれません。仲間が集まって、意見を出し合いながらくずし字を

全文インターネット公開中

本書はオープンアクセスです。

以下のサイトより全文を公開しています。

「第II部 教材編」の問題はPDFでダウンロードして
プリントしてご自由に授業でお使いください。



▼ 同志社大学古典教材開発研究センター

<https://kotekiri20.wixsite.com/cdemcjl>



▼ 文学通信『未来を切り拓く古典教材』特設サイト

<https://bungaku-report.com/kotekiri.html>



解読していく、そのこと自体が楽しいことです。さらにそこに書かれていることが読解できると、なおいっそう興味がわいてきます。少し大げさかもしれませんが、古典に内在する多様な価値観との出会いには、痺れるような快感があります。まさに学びの醍醐味を味わえます。

なぜそうなるのか。おそらく、その教材が面白いからでしょう。自分たちが知っている教科書の古典とは違う、もっと拡がりのある古典の世界と出会えるからでしょう。わたしたちは、そうした出会いの瞬間に数多く立ち会ってきました。未知のものとの出会いによる驚きと感動が、現代のわれわれ読者を古典と共鳴させ、古典への多様な探求につながってくれるのでしょうか。

そうした驚きと喜びの世界へ一歩踏み出してみませんか。それによって、日本と海外、学校と地域、社会と教育、研究と教育の枠組みを超えて、教材でつながっていく大きな学びのコミュニティの仲間入りができるに違いありません。そこには、小学校、中学校、高等学校、高等専門学校、大学などの校種を超えた豊かで知的好奇心をくすぐられる、素顔の教育の現場が立ち上がってくるでしょう。そして、生涯を通して学び続ける喜びを共有できるようになっていくことでしょう。

ここからは本書の構成について案内していきます。

第一部では、古典教育への新しい切り口の入門編として三つの観点から情報を提供していきます。

STEP 1 「古典への誘い方」は、古典教育のあり方を今日の視点から捉えなおし、現場から再構築していく意欲的な取組みを紹介していきます。

多忙をさわめる国語科教員を取り巻く厳しい職場環境のなかで、現代の生徒たちの現実から出発してゴールを目指していくというのは、当たり前のように見えますが、それは古典と現代を結びつけていく巧みな仕掛けにもなり得る

ということに気づかれます。また古典教育では、学習指導要領と生徒の学習環境の多様性の狭間で悩むこともしばしばです。だからこそ現代と古典の境界線上で冒険に踏み出すような試みがあってもいいのではないか。ここではそんな実践例を紹介します。

STEP 2 「和本の誘い方」は、和本で古典の魅力を子どもたちに伝える工夫を問います。小学生や中学生、高校生が古典籍にふれることによって、どのような変化が生じるのか。現代と異なる多様な文化的な価値とどのように向き合うのか、その面白さをいかに捉えようとするのか。普段接することのない和本にふれるという刺激的な体験をすることで、古典への興味、関心をどこまで引き出すことができるのか。さまざまな角度から検証しています。

和本を使って、実物が持つリアリティーを通して古典との距離を縮めていこうとする試みが成立するためには、当然のことながら和本そのものがが必要です。手元に和本がなくても、それを借りることができるならば、さっそく授業準備ができます。また、授業者や学習者のための和本の基礎知識のガイドランスも忘れてはなりません。そのために必要な和本の知識を簡潔にまとめた配布用のプリントなどがあると、和本を活用した授業を導入しやすくなるのではないのでしょうか。そんなすぐに使えるプリントも盛り込んでいます。

STEP 3 「くずし字への誘い方」では、教科書などの活字でしか古典に接したことのない学習者が、生きた古典の多様なくずし字の世界にふれることで、古典への興味、関心の裾野を拡げていこうとする事例と情報が紹介されています。くずし字教材を使った授業を実践することにどのような意義があるのかという不安にこたえる解説を冒頭に示して、くずし字授業への取組みのハードルを低くしました。

くずし字教材を使用した授業をどのように展開すればいいのか。学習指導要領との関わりはどうか。くずし字を使った授業を行う上で必要な知識やスキルをどのようにして得ることができるか。くずし字のアプリをどう使えばいいのか。くずし字教材の素材を探す方法は。具体的に実践していこうとしたときに予想される不安や困難を軽減す

第一部

入門編

古典への誘い方

ることを目指した章です。

第II部では、くずし字学習のための教材を紹介します。そのままプリントして利用できるくずし字教材と、そのまま授業で使える教材解説を掲載しました。教材に記した初級・中級はあくまで目安のレベルです。自由に配点は考えてください。教科書の補助教材として、あるいは、くずし字を読むことで授業へのモチベーションを引き上げる副教材として、あるいは、くずし字を読む練習をしたい人のためのドリルとしても利用できるようにしました。

多忙な学校教育の現場で和本やくずし字を用いた教材を試してみたい、授業の流れの中で興味づけのために導入してみたいと考えたとき、すぐに使える教材やプリントがあれば便利ですが、残念ながらそのようなくずし字教材は、現在ほとんど見当たりません。本書では、教育現場に立つ教員が自分自身の授業の中で、授業計画に従って適宜使用できる、多種多様な教材を紹介しています。ぜひともこれらを授業を活性化する試みのひとつとして使ってみてください。

最後に**付録**として、「くずし字一覧表」と「現古絵合わせカルタ」をおさめました。「くずし字一覧表」は頻出の字母を選定し直して、書き下ろしました。「現古絵合わせカルタ」は、くずし字に関心をもってもらうために、イラストとその解答としてのくずし字の組み合わせをカルタで楽しみながら学習できるように作っています。サイズをうまく調整いただくとプリントアウトしてカルタを自作することもできます。このカルタは小学校の児童向けに大学生が作ったもので、実際に小学校の模擬授業で実践されたものです。

本書で、従来の教科書の古典とは異なった、多様で豊かな古典の世界を探索してみませんか。「生きた古典」の世界をみなさんで拡げていただければと思います。